首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程
阿部朋恒

平成25年度みんぱく若手研究者奨励セミナー 「アートを考える—人類学からのアプローチ」
参加応募用発表要旨

発表タイトル：「山地農耕民ハニの服飾をめぐる二つの審美的水準」

首都大学東京人文科学研究科博士後期課程
阿部朋恒

首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程
阿部朋恒

本発表では、中国西南部および周辺地域に居住する山地農耕民ハニの社会において服飾とその意匠がもつ社会的意味を、とくに地域的多様性と変化に注目しつつ論じる。

従来、ハニ（ここでは、タイやミャンマーでアカと呼ばれる人々もこのなかに含める）の服飾については、それがエスニシティないし出自範疇にかかわる帰属を顕著に反映・表現している点が注目されてきた[cf. Tooker 2012: 35, Kammerer 1998: 664]。アイデンティティの境界づけを支える共同体的実践の体系の一部として、服飾もまた差異の構築に寄与するものとして把握されてきたのである。本発表では、2011年9月～2012年9月および2013年4月～8月に実施した村落調査にもとづいて、上記のような理解が文脈次第では今日でもおおむね妥当することと、そこからは捉えきれない側面がますます顕著になりつつあることを、それぞれ一つずつの事例を通じて具体的に紹介したい。

前者については、ハニの「伝統」に照らして典型的な立地と規模を持つ村落の事例から、衣服や装飾品の着用が、儀礼と日常を分かたずにほぼあらゆる行為を統制する、「祖先の伝統（ヨリ）」の実践を構成するものとして位置づけられていることを確認する。村落生活のなかではさまざまな行為が「○△のヨリ」のように任意の集団や範疇の名を冠して頻繁に言及され、その度にアイデンティティの境界が表現される。このため服飾についても、「われわれ」への帰属を伝達する要素が正しく配置されているか、という点が主な吟味の対象となっている。一方でこの村落周辺には、そこはかつて土司が領地争いをしていた頃、「一宿一飯の恩」の返礼として割譲されたことのある土地であり、このとき土地を貰い受けた土司によって、一帯の住民は彼の本拠地に合わせて服飾の様式と意匠を改めさせられた、という伝承が残っている。服飾にかかわる「われわれ」の伝統が外部に由来するものだということを十分に認識しながらも、人々はなお注意深くそれを順守しているのである。

もう一つの事例では、かつて「村落レベル以上の政治的組織を持つことがなかった」[Tooker 2012: 36]とされるハニとしては例外的に、十を超える数の村落が緩やかに連合して形成されるに至った地方市街に焦点を当てる。この地域では、「ハニの服装は黒一色で（中略）見た目が良くないと誰しもが思っていた。そこで私は、みなに喜ばれ、かつ民族の特色を備えた衣装をデザインしようと考えた」という女性が1998年に開いたアトリエをきっかけとして「民族衣装」の刷新運動が広がり、現在では一般に定着している[白永芳　2013: 79]。さらに、新しく流通するようになった衣装は、大胆な工夫を凝らして機能性と美しさを追求する一方で、「民族伝統の核心」については変わらず保っているのだという。この刷新運動についての分析からは、衣装の各部位、形状、紋様、配色、素材などについて、その歴史的ないし象徴的意味を遡及的に解釈し、評価し、操作していくというプロセスが浮かび上がってくる。

ローカルな「われわれ」の伝統の内へと標準化していこうとする志向と、ハニという「民族」の伝統を新たに再構築していこうとする志向、それぞれ基準が異なるとはいえ、上記二つの事例双方において、服飾は常に審美的な欲求のもとにあるといえる。どちらがよりすぐれて「アート」かという問いの答えは語の定義次第であろうが、本発表で紹介した事例からは、審美的な水準は社会的状況に応じて多様な志向をとりうるのであり、かつ時として急速な変化を見せることがあるということが学べるだろう。